

ルパン

2005(平成17)年9月25日鑑賞(テアトル梅田)

★★★★



監督・脚本＝ジャン＝ポール・サロメ／出演＝ロマン・デュリス／クリスティン・スコット・トーマス／パスカル・グレゴリー／エヴァ・グリーン／ロバン・ルヌーチ／パトリック・トゥーミー／マチュー・カリエール／フィリップ・マニャン／マリー・ブネル／ニッキー・ノード (角川ヘラルド・ピクチャーズ配給／2004年フランス映画／132分)

……ルパンの生誕100周年を記念して、「これぞ総集編」ともいべき「怪盗ルパン」がつくられた……。ルパンの良きライバルは怪人物ポー・マニャンだが、最も魅力的な登場人物は、100年の時を超えてなお若さと美しさを失わない魔女ジョゼフィーヌ＝カリオストロ伯爵夫人。彼女と張り合う従妹のクラリスも健気に奮闘するが……。？ スリルとサスペンスあり、そして謎解きゲームと恋愛ドラマありと盛りだくさんで楽しめること請け合い……。しかし、フランス革命やマリー・アントワネットの首飾りの物語、そして共和派VS 王政復古派の対立などの知識が必要。それがわからなければ、理解不十分のままで終わるかも……？

■ 導入部はルパンの少年時代

導入部の舞台はドルー・スピーズ公爵 (ロバン・ルヌーチ) の館だが、この館は立派な絵画やフランス王家から伝わる見事な財宝に囲まれた超豪華なもの。そして、ドルー・スピーズ公爵夫人の妹であるアンリエット・ルパン (マリー・ブネル) とその夫のテオフラスト・ルパン (ニッキー・ノード) は、1人息子のアルセーヌ・ルパンとともにこの城館の中で暮っていた。アルセーヌ・ルパンの父親の表向きの仕事は武術の先生だが、裏の本業は盗人……。しかし彼の盗人哲学は、日本の石川五右衛門や怪人二十面相と同じように (?), ①庶民からは盗まざり貴族から盗む、そして②殺しはしない、という筋の通ったもの……？

公爵夫人は、自分の妹がこんなワケのわからない男と結婚したことを常にボヤ

いていたが、ある日かつてマリー・アントワネットが所有しており今は公爵夫人の持ち物となっているネックレスがなくなったから大変……。

実はこれは、既に警察に踏み込まれて逃走した父親ルパンの命を受けて、息子ルパンが見事これを盗み出し、父親に手渡したのだった。当然のように、その疑いが父親にかけられたためその妻子であるアンリエット・ルパンとアルセーヌ・ルパンの2人はもはや館に残ることはできなくなり、とうとう今日は館から追い出されることに……。ところが、放逐された馬車の中からアンリエット・ルパンとアルセーヌ・ルパンが見たのは、殴り殺された身元不明の死体。そしてこれは、近くに向け寄ってよくみると、父親の無残な姿にまちがいないものだった……。この導入部が終わると、時代はたちまち10数年後に。ここに若き怪盗アルセーヌ・ルパンの誕生だ。

いくつかの必要な前提知識 その1

今さらここで怪盗ルパンの基礎知識を解説する気はないが、20世紀初頭、原作者のモーリス・ルブランが書き続けた「ルパンもの」は、60編近くあるとのこと。この映画の基本となっている原作が『魔女とルパン』。その中の登場人物の1人が、「地獄から来た魔女」と呼ばれるカリオストロ伯爵夫人であり、もう1人がルパンの強敵となる怪人物のポーマニャン。この原作は、7つの修道院から集めた1万個の宝石が隠されているという前提で、「7本枝の燭台」や「7つの銀の指輪」に秘められた謎をめぐってルパンと強敵が火花を散らす物語。そして20歳のルパンの最初の大冒険となるものだ。さらにこの映画の「味つけ」となっている原作が、多分私たちが「ルパンもの」として1番よく知っている『奇巖城』。これはフランス北西部のノルマンディー地方にある小さな島だが、この映画ではその美しい姿が再三登場……。さらに、人を殺さないことをモットーとしているルパンが、殺人者とされる原作が『813の謎』だが、この映画ではそのモチーフが、死体の近くに血塗られたルパンというサインとして登場する。

いくつかの必要な前提知識 その2

以上が「ルパンもの」の前提知識だが、「フランス王朝もの」(?)として必要

な前提知識は、まずマリー・アントワネットという人物と、彼女が大切にしていた「マリー・アントワネットの首飾り」。「マリー・アントワネットの首飾り」事件は本当に起こった事件で、この首飾りにまつわるスキヤンダルは、1789年のフランス革命、そしてマリー・アントワネットがギロチンの露と消えてしまう歴史的事実の1つの伏線になったことは有名な事実（『シネマルーム1』68頁参照）。この映画の1つのハイライトシーンとなる、変装しアイマスクをかけた紳士淑女たちが集う「仮面舞踏会」の華やかさを楽しむためにも、フランス上流貴族たちの宝石へのこだわりを理解することが必要だ。

いくつかの必要な前提知識 その3

フランス革命成功後も、共和制を定着させようとする勢力に対して、王政復古を狙う勢力が一部存在していた。これも歴史上の事実として、この映画を理解するうえで必要な知識。

この映画における王政復古派たちの陰謀は、3つの十字架の謎のもとに隠されている王家の財宝を狙い、それによってフランス王権の復活を主張するオルレアン公爵（マチュー・カリエール）を王座につけようとするもの。今夜ジュミエージュ修道院に集まった人物たちは、3つの十字架を揃えて戴冠式を実現しようとしていたが、その中心人物はオルレアン公爵や枢機卿。そしてルパン最大のライバルとなるポー・マニャン（パスカル・グレゴリー）。またここには、クラリスの父ドルー・スピーズ公爵や財産目当てに公爵たちと行動をとる医師ポントー（フィリップ・マニャン）もいた。さらに、かつてのカリオストロ伯爵夫人ジョゼフィーヌ・バルサモ（クリスティン・スコット・トーマス）もその一味だった（らしい）が、彼女は裏切り者とされ、今まさに死刑の判決を受けようとしているところ……。そしてその判決は直ちに執行……？

そして、このジョゼフィーヌこそが、100歳を超えてなお、永遠の若さと美しさを保っているという噂の魔女……？

ルパンと新旧2人の女……？

テオフラスト・ルパンとその妻アンリエット・ルパンは仲良く暮し、その息子

のアルセーヌ・ルパンは父親から小さい時から、「立派な泥棒になれ！」と教えられてきた。考えてみれば、これはヘンな家庭教育……？ この父親は息子に武術を教えたのだが、武術でも盗みでも、そのコツは相手の気をそらすこと、と指導……。こういう家庭環境下に育ったせいか、ルパンは女好きのクセに、女にも決して自分の本性を見せない性格に……。そして、どうもそういう性格は女にははっきりとわかるらしい……？

この映画に登場する新旧(?) 2人の女性はいずれも魅力的な美女だが、一方は悪女で、他方は尽くす女……。どちらを選ぶべきか、客観的には明らかだが、こんなときなぜか男はいつも悪女に惹かれるもの……。さてルパンの場合は……。もっとも映画のラスト近くには、おじさん風になったルパンが登場し、その側には新たに引っかけた(?) 第3の女も……。したがって必ずしも新旧2人の女に限定されるわけではないが……？

ラスト近くのこのシーンは歴史上重大な意味を持つ意味シンのものだから、軽々しく見逃さないように……。

ルパンの女その1 ジョゼフィーヌ=カリオストロ伯爵夫人

この映画を面白くさせているのは、何ととってもナゾの美女ジョゼフィーヌ=カリオストロ伯爵夫人。といっても映画の当初、彼女はルパンの母アンリエット・ルパンの姉のドルー・スビーズ公爵夫人として登場し、妹やその息子のルパンを館から追い出す役割を……。

ところが次に登場する彼女は、ジュミエージュ修道院の中。こみ入った話はよくわからないとしても(?),ここに登場するカリオストロ伯爵夫人ジョゼフィーヌは、昔と全く変わらない若さと美しさを保っているため、枢機卿から「魔女」と呼ばれたのは当然。そんなやりとりを盗み聴きしていたルパンは、死刑執行のためボートに乗せられ、縛られたまま海の中へ放り込まれたジョゼフィーヌを救出。これは一体なぜか？ 多分ルパンにもその理由はわからなかっただろうが、私の目には明らか。それは若きルパンが、この美貌の魔女ジョゼフィーヌに一目ボレしたから……？

無事ジョゼフィーヌを救出して、小屋の中で一休みした2人はいい雰囲気にな

ったが、この救出劇の一部始終を観察していたのがポーマニャン。以降、ルパンはジョゼフィーヌの言い分を信用するのか、それともポーマニャンの言い分を信用するのかで、揺れに揺れ、迷いに迷うことに……？

そりゃ、このジョゼフィーヌとポーマニャンがルパンに語る「真相とは……？」の物語を聞いていると、一体どちらを信用したらいいのかサッパリわからなくなってくるのが当然。私にもアッと驚く真相がいっぱいだ……？

なお少なくともルパンは、このジョゼフィーヌが危険な女だと理解しており、後述のクラリスからは早く別れるようにとされている。しかし、危険でも、キレイで魅力的な女性とはなかなか離れられないのが男というもの……？

このジョゼフィーヌに扮するのは、あの名作『イングリッシュ・ペイシェント』（96年）でアカデミー賞最優秀主演女優賞にノミネートされたクリスティン・スコット・トーマス。彼女は1960年生まれだから、『イングリッシュ・ペイシェント』に出演した36歳頃がもっとも美しかった時期……？ この映画でも、すばらしく美しい姿を見せてくれているものの、やはり多少は年齢を感じさせる点があるのは残念……？ それはともかく、この映画の半分は、この魔女の魅力とミステリー性でもっていることはまちがいない……？

ルパンの女その2 クラリス・スピーズ

クラリス（エヴァ・グリーン）は、ドルー・スピーズ公爵とスピーズ公爵夫人の娘。したがってルパンとは従妹になる関係。そしてこのクラリスこそが、青年となったルパンに対して愛を捧げ献身的に尽くす女性。子供時代に別れてから10数年経っているため、ルパンは気づいていないものの、クラリスは父親のスピーズ公爵に武術の先生として青年ルパンを紹介した時点で、ルパンが昔屋敷を出ていった幼なじみであることに気づいていた。スピーズ公爵との「対決」によって武術教師採用となったルパンは、クラリスからの積極的なモーションを受けて、早速その館の中で愛を交わすことに……。

しかし、ルパンがジョゼフィーヌと組んでいる（？）ことを知ったスピーズ公爵は次第にルパンと敵対関係になるとともに、ボントー医師からクラリスが妊娠していると聞かされ怒り心頭……。今でこそ、「未婚の母」とか「できちゃった

結婚」などと気楽なことを言っているが、19～20世紀のフランス上流貴族社会の娘が結婚前に妊娠となれば、そりゃ大騒動……。もっとも、そこで「お助けマン」としてある男性が登場するから、それにもちょっと注目を……？

それはともかく、このクラリスを演ずるのは、彫りの深い顔立ちで『キングダム・オブ・ヘブン』に登場して、その美女ぶりを見せつけたエヴァ・グリーン(『シネマルーム7』36頁参照)。そこでも書いたように、彼女は1980年生まれの25歳だから、まさに今が旬の美しさ。

ルパンは3つの十字架をめぐる謎解きに命を懸けて闘いつつ、こんなクラリスとどんな恋愛模様を展開していくのだろうか……。どちらにしても、いつまでも二股がけを続けることができないことは、大前提だが……？

スリルとスピード、そしてアクションあり！

チラシによると、この映画は「フランスで公開するやいなや、大ヒットを記録、またたくまにイタリア、アメリカ、韓国でも興奮と熱狂に包まれた」とのこと。そして、そこで強調されている謳い文句は、「スリル」「スピード」「アクション！」の3要素。たしかにこの宣伝文句は当たっており、決して誇大広告ではないことは、この映画を観ればよくわかる。主人公のルパンを演ずるロマン・デュリスも若いだけあって、かなりハードなアクションも、スピード感いっぱいになしているうえ、いかにも怪盗ルパン的な冒険心がいっぱい……。

騙しあいと恋愛、そして知的な謎ときあり！

しかし私としては、この映画の宣伝文句としてもっと強調してほしかったと思うのは、騙しあいの面白さと2人の女性をめぐる恋愛模様(?)の面白さ、そして3つの十字架を1本ずつ手に入れながらそれが何を意味するのかを探求していくルパンの姿。すなわち、前述の宣伝文句にあるようなルパンの「体育会的側面」ばかりではなく、ルパンの「知的側面」をもっと強調してほしいと思うわけだ。恋愛模様の勝敗の結論は最初から明らかだが、二転三転するその経過は面白いもの……。また、「怪盗ルパン」や「怪人二十面相」は変装が得意技(?)だから、その騙しのテクニクも当然高度なものとなる。

そのうえ、ジョゼフィーヌが、なぜ100年以上経ってもその若さと美しさを保つことができるのか？ 彼女の「母親とウリ2つなの……」という説明は、ホントそれともウソ……？ 秦の始皇帝が追い求めてやまなかった不老不死の薬はムリとしても、ルパンが活躍していた20世紀初頭ともなれば、それに近い薬が発明されているかも……？ そんなこんなの要素を入り混ぜての騙しあい合戦は非常に面白いものになっているから、そちらにも十分注目してこの映画を楽しんでもらいたいものだ。

ラストシーンの意味するものは……？

脱獄したジョゼフィーヌによってクラリスが殺され、ルパンとクラリスとの間に生まれた息子はジョゼフィーヌに連れ去られたまま。こりゃ、映画は一体どういうエンディングになるのだろうかと思っていると、突然、時代は10数年後の1913年に……。今やかなりおじさん風の紳士となっているルパンは、新しい女性とともに歩いているが、折しもオーストリア皇太子が到着するとのことで、一帯はその歓迎式のための人だかり。彼女からも「あなたは素顔を見せてくれない……」と責められていた(?)ルパンは、彼女がこの歓迎式を是非見学したいと言うため、優しくそれをオーケー。そんな時、皇太子の到着をたくさん見物人とともに待っていたルパンの目に映ったのは、何とあのジョゼフィーヌの姿。100年の時を超えてなお生き続けているという彼女は、今でもあの美しい姿のままだが、そのジョゼフィーヌから大きなカバンを手渡され、皇太子の方に向かって歩いていく若者は、一目でわかるわが息子……。こりゃ一体ナニ。息子はどこでどのように育ったのか……？ そしてあのカバンの中は……？

ここまで言えば、歴史の素養があり、カンのいい人にはわかるはず。しかし、多分本日の観客約60名のうち、それがわかる人はほんの一握り……？ 日本では、「先の大戦」といえば「太平洋戦争」(大東亜戦争)のことだが、今の10代のガキの中には、日本がアメリカと戦争したことも知らない奴がいるらしい……？ とここで「先の大戦」のもう1つ先の大戦は……？ それは、1914~18年の第1次世界大戦だが、それは一体なぜ始まったのか……？ 何事も勉強が大切だヨ……。

2005(平成17)年9月26日記